

(24.9cm×18.4cm)

「音楽家」

坂田 一男 (明治41年卒)

坂田一男は日本の抽象絵画のバイオニアです。パリ時代にキュービズムの洗礼を受け、その後はより抽象化された絵画を目指しました。大正14年にパリで開催された展覧会にはピカソらと肩を並べて出品しました。昭和8年父の死によりパリから帰国。完成作品は全く持ち帰らず、荷物はトランク一つに画集と素描のみだったといわれます。

坂田の考える前衛と日本の伝統的な美術界とは全く相容れないものでした。帰国後は玉島の叔父のもとに身を寄せ中央画壇との接触を断ちアトリエで独自に先駆的な造型に没頭しました。「前衛は無位無冠」坂田の言葉です。

生前に彼の作品が正当な評価を受けることはありませんでした。二度のアトリエの被害や経済的問題から作品が少ないのが惜しまれます。しかし、素描が数多く残されており、「音楽家」もそのうちの一点です。この作品からは、デッサンの段階で推敲を重ねた状況がうかがえます。坂田の作品に暗さは微塵もなくモダンで暖かく時にユーモラスです。坂田を孤高の抽象画家と呼ぶことに、私は少し抵抗を覚えます。彼の作品と生き方を知れば知るほど純粋に前衛を貫いた力強く熱い芸術家だったと思えるからです。

【岡文雄 (昭和53年卒)】



展示場所 / 芸術棟

「銀も金も玉も…(憶良)」

東山 一郎 (昭和20年四卒)

東山一郎氏は現代書壇を代表する「かな書家」である。母校の創立135周年記念特別展として、昨年11月同窓資料館で書展を開催した。会場には、日展特選の「万葉歌」など代表作が並んだ。この作品はその際、寄贈されたものである。

東山氏は笠岡市出身で、昭和20年に岡山一中を卒業、昭和21年に旧制六高に入學。戦後のかな書道をけん引した名門笹波会を主宰する福山市出身の故桑田笹舟に師事。中央大学在学中に日展入選、株式会社和光勤務時の昭和47年に日展特選。昭和50年に退職し書家となり、日展、読売書法展などの審査員を歴任。宮内庁の依頼で、平成2年から皇太子殿下に書道をご進講されている。皇太子殿下や雅子妃殿下のご信任が厚く、銀座で行う個展を毎回お揃いでご高覧されるとのことである。

【植野勇 (昭和43年卒)】



展示場所 / 校長室

「超」

河田 一白 (一夫) (旧職員)

平成20年1月、県内前衛書の第一人者であった河田一白(本名・一夫)先生の遺墨が遺族の近藤美枝子氏から母校に寄贈された。

河田先生は、明治44年に旧浅口郡船穂村で生まれ、昭和25年から46年までの21年間、朝日高の書道教諭として勤務された。

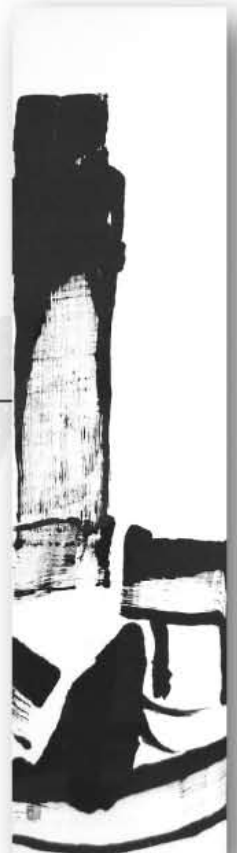
昭和24年の日展で初入選、昭和27年の同展で特選朝倉賞を受賞され、以来、書道芸術院展、奎星会展、日本美術展、毎日展等全国規模の展覧会において数々の賞を獲得された。また、米国・シアトル展、台北博物館における日華書道展へも出品され、作品は当時の、周恩来首相、ライシャワー駐日大使、朴正熙大統領、蒋介石総統など世界各国に贈呈され、その活動の広さにも驚くばかりである。

先生は、書はもとより、書を通じての人間教育に熱心に取り組まれた。個性重視の教育方針で、型にはまらない、まさに粋を超えた指導者であり、卒業生の中で書道を専攻された方は、「大きな字を書いてみよう」という言葉に代表される先生のユニークな授業を懐かしく思い出されることと思う。

【久保健一 (昭和43年卒)】



展示場所 / 北校舎



(半切129.6cm×33.7cm)